



図書館だより

2020.5
No. 33

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123
TEL 0956-47-5958
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

『沈黙』が導いた出会い

木 村 務

(学長)

遠藤周作著『沈黙』（新潮社、1966年）は、学生の頃から何度か読み、多様な人間像の理解や精神形成の糧となった私には大切な小説である。長崎を舞台とし、十数か国語に翻訳されハリウッドで映画化されるなどで世界的に有名になり、新入生もよくご存知で、遠藤周作文学館（長崎市東出津町）に行かれた方も多いことでしょう。これまで、この小説を通していくつかの出会いがあったが、そのうち2つを紹介したい。

1つは最近のことで、昨年11月、韓国の大学で開催された研究フォーラムに参加した際にホスト校の代表としてお世話いただいたL教授との出会いである。フォーラムが終わった懇親の場で『沈黙』が話題になり、片言英語でありながら話しは結構弾んだ。L教授とは初対面であったにもかかわらず、ロドリゲスの苦悩やキチジローの人間像などの理解を共有することができ、古くからの友人のようにつながりを感じた。普遍的なテーマを有する小説ならではのことであろう。夜のカラオケでは、ほぼ同世代として共通のロック音楽を共有していることもわかり盛り上がった。小説や音楽など、文化を共有することは、国境や時間を越えて理解しあうことと同義である。『沈黙』は普遍的でグローバルな小説であることを改めて知った幸せなひと時であった。

もう1つの出会いは少し複雑で、1991年の夏休み明けのことであった。当時私は小さ

な私立大学の一般教育科で経済学を担当していたが、科の同僚でフランス語担当のT教授と話すことが多かった。敬虔なカトリック信者で牧師然とした雰囲気のT教授と、ロドリゲスの苦悩や棄教者のことが話題になった。しかし神の沈黙に対する疑い等に賛同は得られなかった。弱きもののための棄教というテーマについては、カトリック教会の内部に批判もあり、T教授はその立場にあったと思われる。しかし、T教授との『沈黙』談話を通じて、信仰に対する理解がかなり深まったように思う。

忘れられないのは、T教授が私の研究にヒントとなる話題へと導いてくれたことである。教授は、「新レールム・ノヴァルム」という、当時の私には全く未知のことを紹介され、白表紙の小冊子をくださった。タイトルには「新レールム・ノヴァルム－社会主義の弊害と資本主義の幻想」（New Rerum Novarum-Abuses of Socialism and Illusions of Capitalism）とあった。レールム・ノヴァルムとはローマ法王の回勅（全司教あてに出される書簡）のことで、ラテン語で「新しき事がらについて」という意味であり、小冊子は、1991年5月にローマ法王ヨハネ・パウロ二世が出された回勅の日本語訳であった。内容は、社会主義の弊害が顕著になった冷戦末期において、資本主義に対する行き過ぎた幻想を警告し、社会主義と資本主義という二つの経済体制の枠組みを超えた新しい世紀への展望を描いたものである。ちなみに100年前に出された前回の回勅の副題は「資本主義の弊害と社会主義の幻想」というように真逆のタイトルとなっていた。

この「新レールム・ノヴァルム」は、当時ノーベル経済学賞の候補にもあがっていた宇

沢弘文教授（1928-2014年）の進言を受けて出されたということであった。この年の夏、ソビエトは崩壊し冷戦体制は終わりを告げたのであるから、宇沢教授の慧眼とスケールの大きさに驚いたものである。

私は当時、農地利用の協同組織に関する調査研究をしていたが、なかなか出口が見えずに悩んでいた。宇沢教授といえば、『自動車の社会的費用』（岩波新書、1971年）を通じて社会的共通資本という概念を知ってはいたが、この出会いを機に、調査研究の基礎に社

会的共通資本という視座を置くようになり、少し出口が見えたように思った。宇沢教授はその後『社会的共通資本』（岩波新書、2000年）を出され、社会的共通資本という概念を広く世に問われた。

『沈黙』は、グローバルで普遍的な出会いに私たちを導いてくれる。新しい出会いは私にはもうないと思うが、新入生の皆さんには、国内外にたくさんの出会いが待っているだろう。

確かな情報

石 田 和 彦

（附属図書館長）

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。この新年度は、新型コロナウイルスの世界的大流行の影響で、授業開始の延期等、異例尽くめのスタートになってしまいました。2-4年の在学生の皆さんも、授業だけでなく、就職活動やインターンシップの予定が大幅に狂うなど、大きな影響で大変な思いをされていることでしょう。この「図書館だより」が配布される頃には、感染の拡大がある程度沈静化し、世の中全体も、そして本学の状況も、少しでも正常化の方向に向かっていることを願っています。

ところで、この新型コロナウイルス流行の中で、マスク不足やトイレットペーパー不足で世の中が大騒ぎになったことは、皆さんの記憶に新しいでしょう。この原稿を書いている時点で、トイレットペーパー不足はほぼ解消しているようですが、マスク不足は依然として続いています。元々は、流行の初期段階であった2月末から3月初め頃に、マスク需要が急増してドラッグストア等の店頭からマスクが消えたことが、騒動の始まりでした。この時、マスク不足の原因として、需要の増

加だけではなく、「国内で販売されるマスクの大半は中国製であるが、その中国では感染拡大で生産が停止している」という供給側の問題も指摘されました。すると、今度は、「マスクと同じく中国製が大半を占めるトイレットペーパーも、生産停止で今後不足状態に陥る」という噂がインターネット上で流布し、人々が先を争って買いに走った結果、トイレットペーパーも店頭から姿を消すという事態が発生しました。

この2つの不足騒動を、本稿のタイトルにした「確かな情報」という観点から、もう一度考えてみたいと思います。まず、マスクですが、「日本衛生材料工業連合会」の資料によれば、2018年度のマスクの総供給量は約55億枚（1か月平均約4.6億枚）、その内約44億枚（同3.7億枚）が輸入で、約8割を占めています。輸入先の国別内訳は示されていませんが、その多くが中国であると推察され、もし、中国からの輸入が停まれば供給不足になることはほぼ間違いないものと考えられます。さらに、需要面をみても、万が一、流行拡大で日本の人口（2015年国勢調査で約1.27億人）の半分が毎日マスクを使用したとすると、1か月あたりの需要は約19億枚になり、これまでの供給量ではまったく足りません。従って、「確かな情報」に基づいても、人々がマスク購入に走ったことには、一定の合理性があったことになります。

もちろん、個々人にとっての合理的行動が、社会全体としての合理的な結果に繋がるとは限らない訳で（経済学の用語では、「合成の誤謬」などとも言います）、今回のマスク不足騒動の場合にも、緊急度の高い医療機関での不足、高額での転売等の大きな社会的な問題を引き起こし、結局、政府が、補助金付きの増産要請や転売禁止、医療機関向けの買上げ等の政策的対応をとりました。

一方、トイレットペーパー不足の方は、どうでしょうか。経済産業省のHPに掲載されている資料によれば、国内生産106万tに対して輸入はわずか2.5万tで、「中国製が大半を占める…」というインターネット上での噂はまったくのデマであることが直ちにわかります。従って、もし、多くの人々が、「確かな情報」に基づいて合理的に行動したとすれば、そもそも不足騒動は生じなかったはずです。実際、経済産業省や業界団体の「日本衛生紙工業会」が正確な情報の広報に注力した結果、騒動は比較的短期間で終息に向かいました。

この2つのエピソードからわかるのは、個々人が自分の行動を考える際にも、また、政府などが政策対応を考える際にも、「確かな情報」に基づいて考えることが極めて重要であるということです。このことは、今回の騒動に限ったことではありません。学生の皆さんも、これからいろいろな局面で自分の行動の選択を迫られることが多々あると思います。その際には、是非、「確かな情報」に基づいてしっかり考えて行動して下さい。

では、「確かな情報」はどこにあるのでしょうか。いまの学生の皆さんの多くは、情報入手と言えば、スマホやPCを介したインターネットからの情報収集を真っ先に思い浮かべることでしょう。実は、この原稿を書くのに用いた上記の数字や資料も、インターネットから入手したものです。しかし、インターネット上にある膨大な情報は、そのすべてが「確かな」ものであるとは限りません。不確かな情報や誤った情報が多数あり、時には、上述のデマのような悪意を持った偽情報も存在します。その中から「確かな情報」を見分けるためには、情報の真偽を見極める「確かな目」を養うしかありません。そして、「確かな目」は、間違いなく確かである情報に多数触れることで、初めて養われると思います。

図書館というのは、そうした間違いなく「確かな情報」が膨大に集積されている場所です。学生の皆さんが何か疑問を持ったり考える時、あるいは、授業や演習の課題で何かを調べる時には、インターネットで安直に調べすぐにそれを信じたり、そこに書かれていることを丸写しでレポート等にするのではなく、是非、図書館で関連する資料や文献を探して、「確かな情報」に接して下さい。そのことの繰り返し、きっと、皆さんの、情報を見分ける「確かな目」を養ってくれます。学生の間、「確かな情報」の在りかとして図書館を十分に活用し、誤った情報やデマに踊らされず、「確かな情報」に基づいてしっかりと意思決定ができる人に育って頂きたいと思います。 本稿は 4/13 日に執筆したものです。

論文を探して 図書館の奥深くへ

津久井 稲 緒

(経営学科准教授)

皆さんは、論文を手にしたことがあるだろうか。近年はインターネットの普及により、

検索ワードを入力すれば、ネット上に公開されている論文を簡単に引き出すこともできるので、論文を見たことがある人は多いだろう。少し前の話になるが、「10～20年後に無くなる職業」が話題になった。論文を読んだことが無くても、この話題を知っている人は多いのではないだろうか。米国ではAI（Artificial Intelligence、人工知能）の普及によって、

10～20年以内に労働人口の47%が機械に代替されるリスクが70%以上、という内容である。この論文はインターネット上で見ることができる。イギリスのオックスフォード大学の論文で、カール・フレイとマイケル・オズボーン博士により書かれたものである。(Carl Benedict Frey and Michael A. Osborne (2013) “The Future of Employment:How Susceptible are jobs to computerization?”, Oxford University, September.)

多くの論文は、学術雑誌に掲載・発表され、世の中に出てくる。大学の図書館では、こうした論文が掲載されている「雑誌」の現物を手に取ることができる。雑誌とは、一般的には駅のキオスクなどで売られている芸能ニュースや漫画、ファッション誌や趣味のものなどをイメージするが、学術研究誌などの定期刊行物も、雑誌という。近年は、学術論文をインターネット上で閲覧できるサービスが進み（電子ジャーナル）、無料で閲覧できるジャーナルも増えている（オープンアクセス）。学生であれば、大学の図書館 OPAC (Online Public Access Catalog、オンライン蔵書目録) から学籍番号を入力してアクセスすれば、大学が契約している有料の電子ジャーナルを無料で読むこともできる。論文へのアクセスは、電子ジャーナルでも、実際の雑誌でも、可能な時代である。

話は変わるが、古都の寺などへ行き、その寺に伝わる国宝の仏像を見ようとしたところ、そこにあるのはレプリカで本物は博物館にあります、という説明を受け、え、本物じゃないのか、と少々がっかりした経験を持つ人はいるのではないだろうか。現代の文化財の鑑賞方法は、二通りあるらしい。寺社などに伝わる文化財の多くは、自然災害等から保護するために博物館や美術館に寄託されており、私たちは、博物館などで保存状態の良い文化財を間近に見ることができる。もう一つの方法は、実際に文化財が置かれていた寺社を訪れ、その歴史的な時間を感じられる空間で、

周囲の景観とともに文化財のレプリカを鑑賞する方法である。同じ仏像を鑑賞するにしても、前者は美術品としての価値を確かめやすく、後者は歴史や景観など文化財の背景を見出しやすい。仏像へのアクセス方法は一つではなく、いずれの方法にも利点がある。

論文へのアクセス方法も、電子ジャーナルで自分の関心や研究に必要な部分に素早くアクセスする方法と、実際の雑誌に収録されたものを手に取り、どのような時代にどのような論者とともにその論文は書かれたのか、収録されたのかを見る方法とがある。

私の専門は経営学で、「CSR(企業の社会的責任論、Corporate Social Responsibility)」分野を中心に研究している。CSR とは、企業がビジネスだけでなく、地域のことや広い社会のこと、環境問題なども考えて行動することで、こうした考え方を良しとし推進する論文は、CSR肯定論（積極論）という。反対に、公共的な問題は政府や市民に任せて、企業はビジネスに専念すべし、という考え方の論文を CSR 否定論（消極論）という。この分野では肯定・否定論争が展開され、ある時代は大論争となり、近年は下火ではあるが消えてはいない。

大学院では専門分野の基本的な論文をしっかり読み込むことを訓練される。CSR論の基本的な論文は、電子ジャーナルで入手したり、図書館の蔵書から探したりして集めていくのだが、ある時、電子ジャーナルで入手した論文の、元の雑誌にあたってみたいと考えた。CSR肯定論に位置付けられるその論文はフレデリックという研究者が書いたもので、国内外の多くの研究者に引用されている有名な論文である。(Frederick, W.C., (1986) “Toward CSR3:Why Ethical Analysis is Indispensable and Unavoidable in Corporate Affairs”, California Management Review, Vol. 28, Winter.)

大学図書館の書庫、奥深くにしまい込まれた、このカリフォルニア大学1986年の雑誌

を探し出し、頁をめくってみると、それはCSR 論争の特集号であった。対する否定論者はデービット・ボーゲルという。ボーゲルは2005年に『企業の社会的責任（CSR）の徹底研究』という本を出版し、それは日本でも邦訳され紹介された。(David Vogel (2005) The Market for Virtue : The Potential and limits of Corporate Social Responsibility, THE BROOKINGS INSTITUTION. (小松由紀子、村上美智子、田村勝省訳 (2007)『企業の社会的責任（CSR）の徹底研究 利益の追求と美德のバランスーその事例による検証』一灯舎))

本に囲まれた秘密基地

谷 澤 毅

(国際経営学科教授)

どのゼミを選ぶか、その希望票の提出がそろそろ締め切りとなる頃、学生が一人、私のゼミ（専門演習）について知りたいと申し出たので研究室で対応した。歴史を意識して卒業論文を作成すること、本をたくさん読んでもらうこと、本に囲まれて狭いけれどこの研究室がゼミの教室となるなど、一通り聞いてもらって学生は帰った。やがて「本日のお礼」と題したメールが当の学生から届いた。「私は本が好きなので、「本に溢れた秘密基地」という表現にワクワクしました」。このような文面が含まれていた。

私が研究室について説明する際に、それほど深く考えずに使った「本に溢れた秘密基地」という表現にはからずも反応してくれたらしい。そこまで本で溢れているというのではないのだが、この学生が文章にしてくれたおかげで私は「本に溢れた秘密基地」という言葉が喚起するイメージが妙に気に入ってしまった。以来、ゼミを見学に来た学生に自分の研究室とそこでの授業を、少し表現を変え

その本は、「CSRを否定してきたが、CSRは現実的で実態がある。だから存在を認めなければならない」というものであった。ボーゲルは日本ではあまり有名ではない。この本が刊行されたとき、何人かから私は、この人は誰？この本はどういう意味があるの？と尋ねられた。1986年の雑誌を実際に手に取ってみた私には、そこで否定論争を展開していたボーゲルの、肯定せずとも認めざるを得ない、という苦しい思いを感じることができた。電子ジャーナルを読んでいただけでは、この本の意味は分からなかっただろうと思う。図書館の奥深くで体験した話である。

て「本に囲まれた秘密基地」と説明するようになった。

子供の頃、「秘密基地」にあこがれていたという男性は多いことと思う。実際に秘密基地を作って遊んだ体験を持つ人も少なくないことだろう。私は、「サンダーバード」や「ウルトラセブン」に魅了された世代なので、そこに出てくる地中の基地に影響されて庭に大きな穴を掘ってしまい、親に注意されたことを記憶している。大人になってだいぶ時間が経過した今でも、秘密基地に胸をときめかせたあの頃のことははっきりと覚えている。

なかには、少年時代のこの胸躍らせた経験自体が忘れられない大人もいる。そういう人たちが手掛けるのが、「おとなの秘密基地」ということなのだろう。自分の趣味にまつわる、好きなものに囲まれた奥まった空間。狭いとはいえ、さぞかし居心地が良いかと思う。

書斎や書庫も、この種の秘密基地の同類と見なせるのではないだろうか。たまたま興味のあるもの、好きなものが本だったということで本に囲まれた狭い空間が出来上がる。しかも、図書館と違い、個人の蔵書は持ち主の関心、都合により本が並ぶ。一見するとまったく異質の本どうしが隣り合うこともあるし、同じジャンルの本が何か所にも分けて置かれることもある。蔵書とは、「持ち主の知的世



界が忠実に反映された小宇宙」にはかならない。それゆえに、知的生産力旺盛な蔵書家の本棚を垣間見たいという人の期待に応えて、そうした知識人の書斎や本棚にまつわる写真集や探訪記が繰り返し刊行されてきた。

知の世界の秀でた住人であれば、その蔵書の無味乾燥な目録さえもが光彩を放つ「作品」となる。文学の世界の博物学者澁澤龍彦（1928～1987年）の蔵書目録は、2006年に

9,500円（税抜き）で発売された（『書物の宇宙誌 澁澤龍彦蔵書目録』国書刊行会）。この人の蔵書であれば、その「本に囲まれた秘密基地」を成り立たせていた一冊一冊について知りたい。そう思わせる魅力が澁澤龍彦にはあった。

丸善丸の内本店内にあった松丸本舗は、本屋の中に設けられた秘密基地、「知の奥の院」のような書店だった。幾つもの高い壁のような本棚がカーブを描き、本に見とれながら狭い通路を辿ると方向感覚があやしくなった。「千夜千冊」の松岡正剛がプロデュースしたこの「知の迷宮」も、今はもうない。秘密基地にまつわる思い出の一つと化してしまった。

さて、「秘密基地」という表現に反応してくれた当の学生であるが、残念ながら私のゼミ生とはならなかった。秘密基地以外の魅力が私のゼミには不足していたということなのだろう。

公務員を目指す学生たちへ

立花 茂 生

（公共政策学科准教授）

昨年4月から着任しました、立花と申します。私は現在、総務省からの出向で県立大学にお世話になっています。私が所属している公共政策学科は、公務員志望の学生が多く所属していますが、公務員（とくに中央省庁の役人）という仕事は一般にはイメージがあまり良くなく（小説やドラマでも、たいていの場合公務員は悪役・・・）、より多くの優秀な学生たちに公務員を目指してほしいと考えている私としては大変憂慮すべき状況です。そのような公務員にとって逆風とも言える時代に、あえて公務員を志望してくれる学生の皆さんに、私が就職活動をしていた時代や、公務員になりたての時代に読んでモチベーションア

ップにつながった、公務員を主人公にした小説を2冊ほどご紹介したいと思います。試験勉強や就職活動の合間の息抜きも兼ねて、一読してみてはいかがでしょうか。

① 城山三郎著「官僚たちの夏」（新潮文庫、1980年）

霞ヶ関を描いた不朽の名著と言えるでしょう。舞台は高度経済成長期の通産省（現・経産省）。主人公の風越信吾は非常に個性的な人物で、一般的な官僚イメージとは大きく異なる人物です。自らの信念を貫き通すべく、政治家や財界との闘いもいとわず、最終的には失敗に終わるものの、「指定産業振興法」の成立に全省を挙げて取り組みます。また、「人事の風越」の異名の下、省内の人事も思いのまま掌握します。持てる許認可権限や行政指導を駆使した通産省の政策が、海外で“Notorious MITI”（悪名高い通産省）などと称されたように、賛否両論ありつつも高度経済成長期の日本を支えたのは紛れもない事実

です。風越のような、一見横柄にも見える官僚の姿は、人口減少社会に突入しつつある現代日本において求められる官僚の姿とは大きく異なるでしょうが、「この国を良くしたい」という信念の下、理想に向かってまさに命を懸けて突き進む姿は、公務員を目指す全ての者の原点だと感じさせられます。

なお、本作はNHKとTBSで2回にわたりドラマ化もされています。

② 有川浩著「県庁おもてなし課」(角川文庫、2013年)

上記とは一転して、こちらは現代の高知県庁を舞台としたポップな小説です。舞台となるのは高知県庁に新設された「おもてなし課」(ちなみに実在します)、主人公はそのおもてなし課に配属された若手職員・掛水史貴です。著者の有川浩は高知県の出身で、自身が高知県から観光特使を依頼された際の経験をベースにしているそうです(著者をモデルにした人物も、吉門喬介として小説内に登場します)。県庁の「お役所仕事」ぶりを面白おかしく描写しつつも、著者の高知県や高知県庁への愛があふれた作品となっています。

本作は2013年に映画化されていますが、私も公開当時、石川県庁に出向している時期に本作を読むとともに、この映画を見ました。「確かに役所ってこんなバカな仕事してるよ

なあー」とおかしくなる部分もありつつ、見た後には「公務員の仕事ってやっぱり素敵だな、明日からも仕事頑張ろう!」と思えた作品でした。

なお、著者の有川浩は、これ以外にも役所を舞台とした小説を数多く執筆しています。航空自衛隊の広報室を舞台とした「空飛ぶ広報室」(幻冬舎文庫、2016年)などが有名ですが、こちらも小説としては扱いづらい自衛隊という組織を温度感のある人間の集まりとして描写した作品として印象深く、また、堅すぎてもダメ、柔らかすぎてもダメという、役所の広報の在り方を考えさせてくれる点でも大変勉強になる作品です。

以上、おすすめしたい小説をご紹介します。私自身、公務員人生の中で経験するとは思っていなかった学生を教えるという仕事をさせていただいているわけですが、この貴重な期間、授業や講演などの場ではできる限り、「公務員の仕事はとっても面白くて大事なものだよ!」というメッセージをお伝えしていきたいと思っています。それを通じて少しでも、優秀な学生たちに公務員を志望してもらい、長崎県、ひいては日本全体が良い方向につながっていくことを祈念してやみません。

私の「九州考」

朝 浦 幸 男

(実践経済学科教授)

「『九州』はひとつ」と、よく言われる。

我が国において律令制が敷かれていた古代にあって、九州は大宰府によって統轄されていた。しかし、それはあくまで国家の1つの行政区分としてのまとまりであり、国家の組織として位置づけられていたにすぎない。ちなみに、九州とは、筑前国、筑後国、肥前国、

肥後国、豊前国、豊後国、日向国、大隅国、薩摩国の9つの国を指している。

古代から現代までの九州地方の歴史をみると、九州では最も輝いている都市が時代とともに変化してきた。『九州地域学』(千相哲・宗像優・末松剛編著、晃洋書房、2019年)においては、鎌倉・室町時代は大宰府の外港としての博多、戦国時代は国際貿易都市の大分、江戸時代は長崎、幕末・維新時代は鹿児島・佐賀、明治から戦前にかけては熊本・佐世保・久留米、昭和の高度成長期は北九州・宮崎、そして1980年代以降は福岡がその時代において輝いていたと紹介されている。九



州各地ではその地特有の文化が花開き、本当は「『九州』はひとつ」ではなく、「『九州』はひとつひとつ」だと揶揄されることもある。

「『九州』はひとつ」という標語は、第2次世界大戦後、我が国において高速交通網の整備など国土の開発を進める際に、九州以外の地域に対抗するために九州の経済界が中心となって叫ばれてきたものである。我が国の九州以外の他の地域との競争に伍していくためにとられた戦略として九州は「ひとつ」になったのだ。他の地域との比較で価値が決まるといふかぎりにおいては九州には相対的な価値しかない。

九州はひとつひとつに価値があり、九州全体には本当の絶対的価値はないのであろうか。九州に絶対的価値を見出すうえで、大宰府に作られた九州国立博物館の展示の基本的コンセプトである「東アジアとの交流の歴史」は極めて重要である。九州は我が国のなかにあって大韓半島、中国、東南アジア地域など東アジアと最も近く、長年にわたる東アジア地域の人々との交流や対立を通じて九州独自の歴史や文化を育んできた。そして、九州という同じ島で育ったという一体感を持つ九州人を作り上げてきたといえよう。東アジアに近接しているという九州の置かれている地理的特色は九州独自の絶対的価値を形作る大きな要素といえよう。

また、九州は温暖な気候に恵まれ、さまざまな種類の作物がとれる。全体の経済規模では我が国の約1割を占めているが、農作物に限っていえば、二毛作が可能なことから2割の生産高を誇る。地産地消できない作物は、国内・国外を含め、九州以外の地域で販売される。この温暖な気候こそ九州の価値をもたらす第2の要素といえよう。

『九州バカ』（村岡浩司著、サンクチュアリ出版、2018年）は、九州が持つ豊かな自然の恵みに根差した絶対的価値に対する著者の深い愛情が込められた1冊だ。この書において紹介されている著者がプロデュースした「九州パンケーキ」は、まさに「『九州』はひとつ」を体現したもので、九州各地で産出された作物（小麦、米、雑穀など）を使って1つの商品にしたものだ。

最近、スーパーやコンビニでも、パッケージに「九州〇〇」「九州産△△」と書かれた商品をよく見かける。「九州しょうゆ」、「九州産手羽先」、「九州産小麦」、「九州産さつまいも」といった具合だ。産地は九州地方のどこかの県に違いない。それを産地名から外し、敢えて「九州産」と銘打っているのは、九州というブランドにより高い価値をおいてのことだろう。

九州において作り上げられてきた絶対的価値は食物だけに見出されるものではないはずだ。民芸品や人情など、身近な文化や人と人とのふれ合いの中にも多く見出すことができるだろう。九州に生まれ育ち、九州の自然と人々に強く愛着を感じながら生活する者として、これからも九州の様々な価値を探し求めていきたいと思う。

◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）
土曜日：午前9時～午後5時まで
休館日：日曜日・祝祭日・大学閉校日など

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2020年5月25日